俳人 成田千空研究会

千空研究

第7号

少年の日がよみがえる

―千空句版画―

藤田　健次

私は、子どものころ、よくタノクサトリの手伝いをさせられた。そうして除草機を押していると、急に空が暗くなり、雨がドッドッと落ちてくるのである。

この句を読むと、いつも、はるか昔の少年時代の一日がなつかしくよみがえる。そして、一度はこの句を版画にしたいとずっと思ってきた。

今回機会があり、力不足を承知のうえで彫ったのがこの一枚。はたして、千空さんの世界に少しでも近づけたかどうか。

（版画家・会員／八戸市）

目　次

少年の日がよみがえる
―千空句版画―　藤田　健次　1
『文藝春秋』掲載の千空俳句　2
千空俳句の礎(5)　西谷ともえ　3
永住の地五所川原　成田千空をめぐる人々(6)
飯詰時代の意義（一）帰農生活　齋藤　美穂　4
〈千空点描〉第1回文学賞　4
〈作品鑑賞を読む〉⑥
砂山は狼いろに草枯れゆく　市川　栄次　5
〈成田千空資料再録〉⑦　7
某月某日（一）（暖鳥）　7
後日譚（暖鳥）　7
石語抄（一）（陸奥新報）　8
草田男句集鑑賞（萬緑）　8
ノート途次 ―「銀河依然」について　8
一すじに〝人間探求〟
草田男流にあがいてみたい
「暖鳥」同人 成田千空（東奥日報）　11
新刊紹介・会員名簿・北極星　16

千空研究会の事業

①詳細な年譜の作成
②千空俳句データベースの作成
③関係資料の収集
④関係者からの聞き取り
⑤会報『千空研究』の発行
⑥『評伝 成田千空』の刊行

『文藝春秋』掲載の千空俳句

千空俳句が2度にわたって総合雑誌『文藝春秋』に掲載されている。1度めは1973年12月号（52歳）、2度めは1995年8月号（74歳）である。

作品を見てみよう。

家郷吟　成田千空

玉蜀黍四五本山鳥のごと下げて来る
玉蜀黍の苞剥くや層々癒ゆ日へ
かなへびの沢の隠れ身又光る
親の滝子の滝こだまあすなろう
赤々とうつぎの実なり奈落空
陽は西へけものの如くほてる穂田
広々と庭掃いて稲刈りにゆく
束の間や虹の根方の藁の村

ここでは玉蜀黍と書いて「きみ」とルビをふっているが、他では黍と表記している。第1句は暖鳥、月刊あおもりに掲載されたほか、句集『人日』に採られている。

第2句も暖鳥では黍と表記している。玉蜀黍に親しんだ地元以外で、意味を取り違えないよう配慮したものと思われる。

第3句は、かなへび表記したものは、月刊あおもり、暖鳥、県句集、白神山地歳時記、蜥蜴と書いて「かなへび」とルビしたものは、句集『人日』のほか、俳句、俳句文芸にある。

第4句は、県句集と『人日』にあり、第6句は、暖鳥にもある。第5句・第7句・第8句は『文芸春秋』だけで、他に見当たらない。

2度めの句には、他の雑誌・句集などにまったく見当たらない。発表後、他への発表は見あわせている。1度めとの違いはなんだろうか。

みちのく　成田千空

缶清水一つ購ひ旅にあり
みちのくの風と道づれつばくらめ

『文藝春秋』1995年8月号
表紙と俳句欄

つばくらの尾捌き繁き山坂や
山法師黒塚の道濡れそぼつ
あかしやの花ほろほろと鬼女の墓
鐘つけば応ふ智恵子の青山河
万緑の風さやさやと和紙の里
燕とびけふの光の洗ひ鍬

同誌はグラビアの後、本文の初めに随筆欄がある。この号では、司馬遼太郎など著名人10人の随筆があり、短歌・俳句・短詩がそれぞれ1人が囲みで掲載されている。4分の1ページと小さいが、割に目立つ欄である。

月に1人であるから掲載の機会は少ない。力量のある俳人か新進気鋭の俳人が選ばれているものと思われる。

私の知人で同誌に採られた、つがる市の歌人・中村雅之さんがいる。中村さんにその間の事情をお尋ねしたところ、未発表作品が求められ、原稿料も破格だったという。

2度めに発表した句が、他の資料にまったく見当たらないないのは、『文藝春秋』向けの作品を作った可能性がある。読者も俳人ではなく、一般人であることから、理解しやすい句を選んだのではないか。

1句の缶清水は初見である。缶入りの清涼飲料水が、石清水や苔清水のように深山幽谷を流れるように思えてくるからふしぎである。ネットで調べてみたが、この言葉は見つからなかった。

6句の智恵子は、高村光太郎の『智恵子抄』だろうか。だとすると、青山河は阿多多羅山（安達太良山）ということになろうか。

（佐々木達司）

千空俳句の礎 (5)

西谷　ともえ

青森空襲で焼け出された千空さんは、母の本家に嫁いでいた長姉、寿美栄を頼って北津軽郡飯詰村へ移住する。既に亡くなっていた姉の夫、岡田晴秋の書斎を使用したという。小学校教師の姉が仕事で留守の間は田畑の仕事をし、雨の日は晴秋の蔵書を読むという生活を送っていたが、間もなく終戦を迎えた。この帰農生活は、昭和二十五年、五所川原市新町に書店を開くまで、5年続いた。しかし、書店をはじめてからも繁忙期には姉を助けて農作業に精を出したという。

今回は、「千空俳句の礎」の最終回として、千空さんが帰農生活のあたりまでに読んでいたとされる本を紹介しながら、千空さんの俳句に対する思いを感じ取れるエピソードを紹介したい。帰農生活を終えたとき、つまり書店を開業した昭和二十五年ころであるが、既に「萬緑」では巻頭を飾り、「暖鳥」の同人としても活躍を見せている。よって、このあたりで、千空さんの俳句の礎は固まったとみるべきであろう。

まず、俳句関係の本である。俳句をはじめて間もない昭和十七年頃に読んだ、高浜虚子の『進むべき俳句の道』。これを読んで、俳句というものの特異さと確かさに惹かれ、「我が進むべき俳句の道と思い定めた」という。「進むべき俳句の道」は大正四年から俳誌「ホトトギス」に連載した俳論で、新傾向俳句に対抗して、守旧派の有望な三十二人を選び評している。これまで虚子は主観句を多く奨めてきたが、安易な主観句の投句が多くなり、これではいけないと、もう一度写生を勧める意図があった。千空さんによると、虚子は本質的には「有情の人」であり、この「進むべき俳句の道」では、「客観的な対象の中に主観を生かした個性的な俳句が評価されている」という（『俳句は歓びの文学』）。特に村上鬼城、飯田蛇笏、原石鼎、前田普羅、渡邊水巴の名を挙げて、「主観を活かした写生の唱導」といっている。虚子は昭和に入り「花鳥諷詠」の理念を提唱する。虚子は、この理念で素晴らしい俳句をたくさん作ったが、千空さんにとっては「進むべき俳句の道」の頃に発表された虚子の俳句の方が興味を惹かれるようである。また、同じ頃、大野林火の『現代の秀句』を読んだ。千空さんは、水原秋櫻子、山口誓子、富安風生、中村草田男、加藤楸邨ら十三人の現代俳句作品の鑑賞と作家論を読み、「さらに眼からうろこ」が落ちたという（注1）。

俳句をはじめた頃はこれ以外の俳句の本もたくさん読んだようである。改造社の「俳句研究」を定期購読したり、妹の信子さんの初月給で『俳句三代集』全十巻をプレゼントしてもらったりして、俳句に夢中になっていた（注2）。

俳句以外の作家では太宰治に傾倒し、美術では棟方志功を愛した。千空さんがみた太宰の人間像は『俳句は歓びの文学』から抜き出すと「魂の告白を文学の究極としていた作家」「意思と感情の振幅が大きく、発明発見をおこたらない新しさと、伝統の不易性を見さだめる眼があった」作家であり、「パロディのおもしろさやユーモアの源泉も」あり、「しかも文学に生命をかけていた人」である。特に「津軽」に影響を受け、初の群作「玫瑰紀行」や、戦前の句で、『地霊』の二番目に据えた「岩木嶺は大きく手毬唄やさし」が生まれた。また『地霊』の後記に「津軽」の一節を引用してこう語っている。「私たちは、やはり祖先のかなしい血に、出来るだけ見事な花を咲かせるように努力するより他に仕方がないようだ。……私もまた、けっきょく、俳句のなかにそれを求めて来たといえるように思う。」千空さんは、〝○○に生命（魂）をかける〟創作家に共感し、尊敬するのである。ジャンルは違えど、太宰にも志功にも同じものを感じている（注3）。そしてそれは、自身の目指す俳句の道でもあるのである。

（注1）千空さんは大野林火も「人間探求派に現代俳句の方向を感じて最も力をいれて書いて」いると述べている。

（注2）信子さんの記憶によると、代用教員だった当時の月給は三十円で、その全額を千空さんにプレゼントしたとのこと。

（注3）千空さんは「棟方志功版画大柵」（昭和四十四年講談社刊）を大切にしていた。五所川原の鶴常書店が三冊仕入れた内の一冊を購入し、後日青森市松木屋デパートで行われたサイン会に参加した。千空さんの奥様、市子さんの話によると、サイン会場で志功の前に立ち、「成田千空です。」と告げると志功は「千空か」といって顔を上げ、更に「自分は東京に出て頑張る。お前は青森で頑張れ」と言葉をかけてくれたという。

（青森県近代文学館文学専門主幹・副室長／青森市）

―永住の地五所川原　成田千空をめぐる人々(6)―

飯詰時代の意義（一）　帰農生活

齋藤　美穂

結核のため生家で療養していた千空さんは、終戦直前に受けた青森大空襲の後、五所川原の書店を拠点に俳人として本格的に始動するまでを飯詰村で過ごしました。後々影響を与えた帰農生活、そして俳人という生き方に決定的となった出来事を振り返り、飯詰時代の意義を考えてみたいと思います。

一　「二人のかあさん」と俳人・成田千空

飯詰村（現在の五所川原市飯詰）の旧家・岡田家から青森市の成田家へ嫁いだ千空さんの母・ナカは夫・伝吾に先立たれ（昭和四年、享年四十五歳）、家業の食料品店を営みながら八人の子どもを養育しました。長姉・寿美栄は勉学に励み、女子師範学校を卒業後に母の実家である岡田家の跡取り・岡田晴一と結婚。共に教員として勤めましたが、寿美栄もまた夫に先立たれます（昭和九年、享年二十八歳）。晴一は晴秋という俳号を持つ俳人で多くの蔵書を残していました。昭和十六年、二十歳で肺を患い絶対安静となった千空さんに、母は一口ずつ食事を運び、姉は飯詰から本を運んだのです。寿美栄は亡き夫が同人であった高松玉麗主催の松濤社を紹介し、母は千空さんが病床で聴かせる俳句に喜びを伝えました。

白鳥の啼かんとす頸ほそりけり
家の奥さみしくなりし深雪かな
土くれのおのづと割るるあたたかさ
何に対しても尽くすことができず、非常時下のかすかないのちを念じて句作をしていたようです。俳句をつくっていると、こころが透明になってくる感じがしました。

（『俳句は歓びの文学』成田千空著）

寿美栄は定年退職まで飯詰を離れず、戦後も弟妹にとって頼りになる存在でした。物質的な援助だけではなく、何よりも読書が好きで、文学に生きる人生を理解した「飯詰のかあさん」でした。戦争と死病という困難な状況にある千空さんに、俳句の世界に入るきっかけと句作への安心感をもたらし、俳句一筋の生き方を終始肯定した「二人のかあさん」の存在なくして、俳人・成田千空の物語は始まらないでしょう。

千空さんの長兄・伝一が岡田晴一の妹と結婚すると、成田家と岡田家は家系的にますます深くつながっていきました。千空さんにとって飯詰村は少年期から親しい土地でした。農作業の手伝いや気が置けない人々との交流は胸に深く刻まれ、生涯にわたって詠まれた故郷や農業に寄せる俳句の源流となったことは言うまでもありません。

子供の頃、夏休み冬休みになると父親の実家の方には行かず、母親の実家の飯詰へ遊びに行きました。母親の実家は山庄屋だったのですよ。普通の庄屋ではなく山庄屋、あの辺の山をずーっとまとめていたんです。母の生家では山の神を非常に大事にするんです。そういう津軽の昔からの風習が残っていたんです。

（『文芸あおもり』第一五三号　特集　故郷）

共に汗を流し家族同様に過ごした親しい人にとって、千空さんは「俳人・成田千空」である前に「何でもできる力（ちから）さん」でした。今回は「力さん」のお話を書きとどめておきたいと思います。

二　当時の記憶をたどって

飯詰村は十四世紀には「高楯城」という山城を擁していたと伝えられています。由緒ある寺社や地域に伝わる伝統行事も数々あり、人為的な営みの歴史ははるかに長い地域であることを物語ります。昭和二十九年に市制が施行され五所川原市と

【千空点描】

第1回文学賞

新たな文学賞は第1回受賞者で水準が決まるから、選考は厳しく慎重に進められる。

千空さんは第1回の賞を3回も受賞している。最初は32歳のときの萬緑賞、次いで59歳の青森県文芸協会賞。3回めは83歳のみなづき賞である。

萬緑賞は「大粒の雨降る青田母の故郷（くに）」など一連の句が対象の作品賞だったが、ほかの2賞は業績に与えられる賞である。

みなづき賞に決まったとき、千空さんは「おれは第1回に縁があるのかな」と言っていたが、賞決め手は作品と実績である。

77歳で受賞した蛇笏賞は第32回と歴史のある賞だった。そのときは、

われとわが千の空から花吹雪　（忘年）

と、喜びの句を詠んでいる。

〈佐〉

合併、市の中心から外れた地域のように考える方が多いようですが、地区内をめぐる虫送りなどの行事は健在で、かつての繁栄をしのぶように催されています。

飯詰で農業を営む岡田年正さん（八十五歳）は、初めて会った少年の頃から、従兄弟で兄貴分の千空さんと折に触れ行動を共にしました。そのお話からは、自然体で過ごした若き日の力さんが浮かんできます。

○岡田家は村の旧家

柿の木の葉も実も青く仮寓の身　　千空

本家の晴一おじさんが亡くなったあと、その二階に親戚が住んだことがあって、何度か行っています。二間あるうちの一部屋は天井近くまでずーっと厚い本が並んでいました。骨董類が収まる長持もありました。古い甲冑が残されていて、敗戦が迫ったある日、力さんが米軍に押収されることを心配して裏庭の大きな柿の木の根元に埋めようと言うのです。ところが数年後に掘り返してみると、糸が腐ってバラバラになってしまったと話していました。

本家の茅葺き屋根の補修作業を何人かと手伝いました。長さを揃えて切った茅の束を屋根に差し込む作業です。その時、古い茅に混じって大小の刀が出てきました。家の守刀として屋根に差し込む風習があったらしいと近所の床屋さんが話していました。

○若いものどうしで

喪の家の火と酒に酔ふ農の血や　　千空

（叔母・岡田ナオ死す）

戦時中、村の各家で密かに作った濁酒がありました。力さんは私の母が作る酒がおいしいと言って時々遊びに来て一緒に呑みました。たくさん呑むわけではありません。力さんは話がとてもおもしろい人。「こんな嫁っ子欲しいな」などと話したこともあったけど詳しくは覚えていません。力さんが鏡を見て書いた自画像を見せてくれたこともありましたが上手いものでした。

○当時の田仕事

煙さへ朝の生きもの田水張る　　千空

田植え時などはまだまだ寒くて朝から火を焚き、一杯飲んでから仕事にかかりました。昼は三升もの米炊いて、蕗や蕨漬けや身欠き鰊なんかをおかずにして皆で食べました。もちろん茶碗も箸も持って。箸が足りなければ、畦の木の枝で代用しました。

村には「ゆわいっこ」と呼ばれる互助作業がありました。力さんがうちの家の稲刈りを手伝ってくれた時は、村を走っていた木材運搬用のトロッコ線路を使って、刈り取った稲を積んだリヤカーをよいしょよいしょと押していきました。力さんは知恵があって助かりました。病弱という印象は全然ありません。俳句を作っているところも見聞きしたことはありませんでした。体格もいいし、とにかくよく働き、何でもできる人でした。

当時の田の作業は、馬による土おこしから始まって代掻きも馬が中心でした。馬は本家で育てていたと思います。力さんの仕事は田植え時の型付け、苗代運び、苗撒き、稲の刈り取りなどでした。型付け作業は丈夫に作られた八角の型枠を使います。それを転がして田にマス目状の型をつけて、その四隅に苗を植えます。横幅があって、野外の水田で操作するのは見た目より難しいものだから男性の役割でした。まっすぐ苗を植えること

【作品鑑賞を読む】⑥

砂山は狼いろに草枯れゆく

一読して渺々たる北方の風土が眼前にあらわれてくる。風荒らぶ海岸線に立つと、四方から襲いかかってくるような冬枯れの風景は、人を寄せつけない、すさまじく荒涼たる辺境の地であった。「狼いろ」とはまさに詩人の目によって蘇生させた、まぼろしの獣の再現であり、全身から発せられる言いようのない殺気に似た寒気団は綸言に恐怖心を与える。風によって舞いあがった砂礫が、前面の荒草に容赦なく襲いかかって、まさに戦国における群雄割拠の様相をおもわせる。枯れ果てた地から、一切の妥協を許さない壮絶のドラマがあったのか。

こう想いながら、この人の住む北辺の風土に、かぎりない憧れを持つのは、失われていく日本の情感が生き残っている事に、たまらなく魅力を感じるからであろう。しかし現実はそんな甘い感傷を寄せつけない、自然との戦いの連続であって、日々生活と隣り合った自然からの叫び声でしかないのかもしれぬ。また、みずからの営みの中で、生活の知恵として育ててきた歴程は、確かな個性を開化させる土壌を、育くむ結果となっているようだ。（以下略）

（俳人／市川栄次）

＊『現代俳句の百人』牧羊社　１９７９から。

はその後の作業を左右するから、型付けは大切な作業なのです。力さんはこの仕事が得意でした。

年正さんのお話を通して農作業を取り巻く村の景色が見えてくるようでした。千空さんは得意の型付け作業をするために、結婚後も田植えには駆けつけたそうです。農村の繁忙期には行かずにはいられない――飯詰の人々は「力さんが来た！」と歓迎したことでしょう。

三　実体験と作品の間

飯詰村への移住と帰農生活には必要に迫られた事情がありました。青森空襲で壊滅的な被害を受けた生家では、出征の留守を守る母と嫂が焼け跡に掘立小屋を立てて生活を始めていました。一方、長姉・寿美栄は、日中は教員として働き、帰宅後は野良着に着替えて畑仕事をしながら子育てをしていました。病後の身であっても労働は目前の状況でした。

それと同時に、質量ともに多読の生活を続け、中央の新しい俳句作家の作品を学んでいた千空さんは、人間としての生き方が作品に深く関わることを強く意識していったように思います。

飯詰での帰農生活はそのどちらも満たすことになりました。将来への不安や迷いのある漠然とした日々ではなく、生きる意味と俳句という文学の可能性を模索した日々。労働と実作、協働と孤独。青森の句会や生家の庇護から少し距離が生まれました。山河の懐に心身を預けてエネルギーを充填し、自分自身の方向を打ち出すという意味で重要な五年間であったのだと感じます。

大粒の雨降る青田母の故郷（くに）
空蝉の脚のつめたきこのさみしさ

こうして見ると、帰農生活から得た実感から、俳人としての道を決定づける代表句が生まれたのも決して偶然ではなかったと言えるのではないでしょうか。

共に農作業をした年正さんは「大粒の雨降る青田母のくに」の俳句を見るたびにある光景を思い浮かべるそうです。それは小学校五年生の頃、田植えをするために村人が集まったのですが、ひどい土砂降りに見舞われました。苗を植え込む型が消されてしまう勢いです。何度か型をつけ直しますが、これでは仕事にならないということになって、皆で早い昼ごはんを食べました。お櫃のご飯と蕗漬けなどが並びました。これがうまいと力さんも食べました。その後晴れ間が出て、無事田植えは済みました。年正さんは「その時の俳句だ」と信じているようです。

この句について千空さんは「田の三番除草をしました。」と自解しているので、年正さんの光景とは異なります。しかし、二人のあいだにはたくさんの共通の実体験があります。一句をめぐりつながる風景を共有する人が飯詰にいることは、千空さんの帰農生活の意義を語るに十分なのではないでしょうか。千空さんから一句が生み出される背景には折々の光景が横たわっていることでしょう。そんな考えがよぎって、私は年正さんの言葉にうなずいたのでした。

四　一つの疑問から

若い時から人前に出るのが億劫だったと述べる千空さん。寡黙な印象は晩年まで変わりませんでしたが、家族や同年代の従兄弟たちとのお話からは打ち解けた素顔を垣間見ることができます。俳人という生き方を選択するまでには本人も周囲もどれほどの覚悟が必要だったのだろうと、市子夫人に思い切ってお尋ねしたことがありました。その時「千空が俳人として生きる人間だということを意識し覚悟した時点というのは誰に話してもわからないでしょう、千空自身のことですから。だけど俳句で生きるためには、人間としていろいろな苦労や働きを、自ずから体験すべきで必要なことと考えていたのでしょう。」と言葉を選びながら答えてくださいました。

飯詰時代にはその答えがあるのではと思いました。しかし、私が見つけたものはそうした意識的な考え方や葛藤ではなく、「懸命に労働する力さん」と「俳句の可能性に惹かれ、寸暇を惜しんで学究する千空さん」でした。敗戦後の混乱や生活の困難に直面しても、他の道を選択する理由にはならず、千空さんはますます俳句への道に邁進していきます。

いろんな話をすれば可笑しくなりますが、
堕農なんですよ、雨が降るのが最高の喜びなんです。雨が降ると本を読むんです。開墾ばかりでなく田もやりました。山から帰って来ると柴しょって来るんですよ、本読みながら。
村長が「二宮金次郎歩いてらじゃ」と。車も何もいないんで山道を、リルケとかロダンを読んで歩く。

（『文芸あおもり』第一五三号　特集　故郷）

飯詰村では晴れの日と雨の日の二つの生活がありました。次回は文学で頭をいっぱいにして過ごした時間についてお話したいと思います。

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

【俳誌『暖鳥』】 続き

某月某日（一）

成田千空

晩くまで馬鹿噺をして、とうとう友人の學校に泊つてしまつた。

早朝。ピアノの音に眼が覺めた。――みると傍らの友人の寢床がつめたく抜け殼になつている。しいんとした校舎の奥深くより、ひとすじ山のはざまの清冽な流れのようにきこえ(え)て來るその音に、耳を澄ましていた。ふと、〈この音は昨夜の馬鹿噺とどんな関係があるのかしら〉と思う。こんな世界とあんな生活。――

佐藤春夫は家人にまるで信用がないという。ドストイエフスキーに会つてみたところで、くそ面白くもないだろうという小林秀雄。藝術家は必ずしも人々の前に姿を現はす必要がない。藝術家は人々に、いゝ音色だけ送つていればいゝのだ。とは確か太宰の辯。これは反面、藝術家の日常のかなくさ(かたくなさ)と、藝術のきびしさを物語る。

◇

志賀直哉の觀た夢殿の觀世音。作者から離れて一個の存在になつているからいゝのだというこれは考えてみると、技術上の問題が意外に大きな比重をなしていることに氣がつく。吾々が考えている「作品に於ける人間」という問題を一應措いたところに志賀の言葉が成り立つている。つまり、夢殿の觀世音は純粹な造形。ところで純粹な造形というものは、制作上、大脳の働きより小脳の働きの方が大きな比重をなしているわけで、作者から遊離する率も大きいわけであつた。だが、問題は存在ということである。作品が一個の存在になつているということは大變なことだ。（作品が存在している以上、そのナマな作者に会う必要がないわけである）。このことが一番大きな藝術の條件だとなると、現今のそこらの藝術家輩は忽ち遠のいて、ケス(シ)粒程の存在になつてしまうか、そこらのMちやんHちやんと五十歩百歩の人種になつてしまうのであつた。

この技術の難関に、人間のモラルの問題がからんだ現代の藝術の、藝術、である以上、一個の存在として削造（注 創造）されなければならないとなると、〈ボーヨー、ボーヨー〉と山鳩のように歎いたあの狂氣の詩人の氣持にもならざるを得ざる。

◇

窓をあけて外をながめる。

桐の實。雀の羽ばたき。ひとの家の小さな縁側が見い(え)る。さゝやかな一家の朝餉が脳裏に浮ぶ。

MちやんHちやんは藝術の門外漢。とすればMちやんHちやん的藝術家（九十九％）は藝術家づらするのを、よした方がいゝことになる。

雀がちよんちよん跳ねて、あつちへ行つたりこつちへ來たり、――あなた、つゝましい庶民のこゝろに歸りなさい。

昭和26年3月号

後日譚

成田千空

M君「千空氏の〝某月某日〟を讀んだよ」

H君「駄目だなあ。あれは。十九世紀的思想だ」

千空「それから？」

H君「自分で自分の言葉に醉つてるよ」

M君「ポーズが見い(え)る」

千空「それから？」

M君「Mちやんとは何だ」

H君「Hちやんとは何だ」

千空「あ、そうか。然し何も僕は君達のことを言つた覺い(え)はない。どだい、僕は僕自身のことでいつぱいなのだ。某月某日、〝藝術〟というものが、ふと、怖しくなつて、自分の心の中のMちやん、Hちやんに愛憎こもごも覺い(え)たというわけさ」

H君「それにしても、大衆は藝術の門外漢だという思考の古さが殘るよ」

千空「困つたな。藝術作品が大衆の心に生きるということは藝術の理想だろう。そこで、そういう理想的な藝術作品というものを考えた場合、藝術に對する一種の畏れを覺い(え)るし、又すぐ得意になりたがる自分の心の中のMちやんHちやんをどやしつけたくもなるのだ」

H君「しかし、俳句は嚴として大衆藝術だ」

千空「それは否定しない。しかし、端的に言つて、作品をつくる以上いゝ作品をつくりたい。出來れば、藝術として通る作品を産み出したい。そういう要求はH君にもM君にもある筈だ。この邊からだんだん前途〈ボーヨー〉の感がしてくるのだ。その追求のために、生涯を賭ける決意があるかしら。少くとも、藝術というものに對する甘つちよろい思いあがりは、お互いに慎しまうということだ」

M君「俳句ではメシが喰い(え)ないからな」

H君「しかし、あの文章は思いあがつているよ。ハツタリがある」

M君「とにかく、ひどい憂うつだ」

千空「井の中の蛙が、前途〈ボーヨー〉となつて、天井

に向つて、わめき散らした恰好になつたからね。やむも得ない」

M君「その邊の藝術家はケシ粒に見いたわけか。ケシ粒をケス粒と書いていたよ」

千空「いやになるな。ケスは多分誤植だろうけど。だいたい、H君にしても、M君にしても大衆云々などと言つていながら、自分だけのことにこだわつている。その證據に、MちやんHちやんは自分の事だと感ちがい（注 勘ちがい）して、フンガイしたのであります」

M君「多分ね。しかし、それでいいさ」

H君「ウヌボレはいゝ。若いうちはいくら自ぼれても自ぼれ過ぎるということはないそうだから。〈われこそは藝術家〉と思い込んで一向さしつかいないわけだ」

千空「親の脛を嚙つている間は……。ということになるのざやないか」

昭和26年5月号

【『陸奥新報』】続き

石語抄（一）

成田千空

「後れ来たらん者は」日に映え冬の薔薇
ナルシスという語は愛なし夜気の冷え
をのこ児に返辞の誇り寒花
しやぼん玉あはや因果律・確率・平和
雪嶺をつひに仰ぐことなき豚なり

昭和27年4月20日

【俳誌『萬緑』】

中村草田男句集「銀河依然」鑑賞

ノート途次 ―「銀河依然」について

成田千空

志賀直哉の「赤西蠣太」の朗読をラジオで聞いたことがある。朗読する女の声と、その、ふにやふにやした口調が、すつかり原作の感じをぶちこわしてゐた。

草田男の作品には果して、如何なる声調が必要であるか。

光太郎は、嘗つて、「俺の詩には変な口調など付けないで、棒読みにして貰ひたい」と言つた。棒読み。しかし、草田男の作品は、今のところ僕には黙読がいちばんふさはしい。

日に咲き盛る薔薇の花の、あまたの襞を重ねながら、孤独な芯をひしとつゝんでゐる。

「銀河依然」には太陽に関する句が四八句在る。すると、一寸待つてくれ、自分の作品は、みな、太陽に関するものだ。と、横槍が入りさうなほど、全作品の重大なポイントを成してゐるやうに思ふ。

頭を伏せし蜥蜴と聴けり日の言葉

×

日の自足森の中なる旱道
日は天眼楠高く鵙も中ら枝に
耕馬に朝日天地睫を開けにけり
天日やぶさかただ応々と麦伸びる
不天の初日われよくも死なざりしかな
水の日は証新樹に訓満つ

森の中を旱道が一本つらぬいてゐる。日は全一なるものの生命体。日は存在（自足）しゐる。森はこの一本の旱道によつて支えられてゐるやうだ。太陽は実は森の生命の根源だ。（あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我がいのちなりけり）。永遠を希求する詩人の魂と、生活する人間の精神。こゝでは、あらゆる存在の根源としての日が自足してゐるのであつて、必ずしも生活上の人間が自足してゐるわけではない。日の自足は、実は、己れの願望なので、自足に遠い人間にとつて、旱道は日の残骸だ。ポイントが二つある。自足に遠い生活上の人間が、生命の根源としての日の自足を強く詩はざるを得なかつた。古風な太陽にからまる観念に惑はされて、これを一蹴するのは勝手だが、その結果、人間の生活の現象面だけが人間及び社会の実相だと、一辺倒に傾く行方が怖しい。それこそ人間の一種の自足ではないか。「炎熱や勝利の如き地の明るさ」。表面は全肯定の様相を呈してゐながら、底に人間の悲哀のひゞきを感ずる。どちらも草田男にとつて本当だらう。つまり、草田男の全肯定は、殆んどといつていゝ程、魂の願望――己れが己れを救助する決着点として現はれてゐる。と言つていゝやうに思ふ。救助する方法は別にあるだらう。しかし、人間の存在の根源といふものを確めないで、方法は何の意味があるだらう。

嘗て、草田男を、平面な平和に終ることを怖れる。と言つた人があつた。僕もまたこれを一つの宿題として置いてもいゝ。しかし、「平和」は存在なのだ。人間が人間の故郷を、先づ、体得するといふ前提をもつ存在だ。サルトルの社会参加から平和への行動は、周知の通り、「真に実存する国籍人なら、必ず、相会し得る」といふ出発点を持つてゐる。草田男の太陽は、草田男の故郷とシノニムなので、こゝから草田男の行動がはじまる。先づ作品創造といふ行動が。「人間の国籍とは、彼らの

〈生き方〉〈働き方〉〈愛し方〉そのものです。」国籍は記号ではないし、平和は名称ではない。「何よりも多く出会ふのは人間ではなく、記号であり、名称です」とサルトルは言ふ。

そこで、僕自身の問題をふくめて宿題を一つ。

太陽が人を殺すといふ機能だ。つまり、因果の法則だけではものを完璧に保証し得ないといふ現段階では、うかつには太陽の自足も信じられぬといふ宿題。

草田男の国家意識――これは殆んど説明を要さぬ程自明なことだ。

山河の光断崖上の蘖に
寄りあふ蘖国の盛時を忘れめや
蘖は南栄す国の生命いとし
切株しめり蘖に玉通り雨

これを難ずる人は気分で難ずるのだが、生憎、こゝにはそれにお相手する気分がないといふわけである。敗れた国の色彩は如何なる色彩の国であつたかといふ批判。勿論、これは大きな問題に違ひないが、それより先づ、ぎりぎりの現実の、国が敗れたといふ事実に、如何なる性質の感動を受けたかといふ事が問題だ。「滅び」に無関心な人々に、再び、自分達の国を築き、これを守るといふ情熱はあり得まい。「蘖は南栄す国の生命いとし」（どういふ国？）。好む好まぬに関らず敗れたといふ現実に在つては、（それは、自分の生れた国だ）といふ意外にないのだ。自分を生んだ国。草田男は草田男流にそれを「国の盛時」といふ。国の生命イコオル国の盛時だ。「忘れめや」。それは真の国籍人としての、人間の存在に関はる願望だ。従つて、こゝを基点した行為の方向には、嘗て、人間を歪つにした莫迦々々しい盛時（軍国）など考へやうもないではないか。蛇足を一つ付け加へれば、この本道を通過しない限り、世界連邦運動も単なるオポチュニズム以外の何ものでもあるまい。（演説口調は慚愧に堪えぬが）。

永き日の餓ゑさへも生いくさなすな

僕はこの句はあまり高く買はぬ。説明を脱し切つてゐないから。（「生」といふ実態は本来、説明を要さぬ）この一事を保証する快作は勿論、句集中にわんさと在るが、この句の前を黙つて通過するには引つかゝるものがあるので、野暮に採り上げる。

冬を経て、漸く日の当る時間が永くなつた。うらゝかな日射しがもののいのちに燦々とふりそゝいでゐる。為事を持つ者にとつては天与の時間である。精いつぱい働く者は、うずくやうな飢ゑを覚える。餓ゑは、しかし、現実の時間――歴史、社会のシステムと無関係ではあり得ないだらう。現世の不安現象は、人間の生に関はる時間感覚の喰ひ違ひが、それぞれのシステムを産み出し、それ自体、巨大なエネルギー体となつて、逆に人間がそのありかを喪失しつゝあるといふ現実だ。こゝではもう、「うららかな日ざし」などと呑気に構えてゐられぬ。そこで人間は再び「生」の感覚を生身に湧き立たす必要にかられざるを得ないのだ。これは矢張り、人間の存在に関はるもので、二つの状態に挟まれた中間無人地帯（ノーマンズ・ランド）といつた場に中腰で構えてゐられない生命の衝動なのだと思ふ。人間が「生きてる」といふ感覚は、必ずしも幸福な状態ばかりではあるまい。「餓ゑさへも生」。苦痛もまたいきいきとした生命の一つの状態ではないか。争ひは幾ら争つても足りぬ程複雑な世紀に違ひないが、「生」さへ在らば、いづれ人間の永い時間が方向づけるとして、とにかく、せつかちな武力の発動だけは為してくれるな。勿論、それだけの願望に終るならば、やはり一つの盲点を生むが、根源的な「生」に結びついた作品の息吹きが、いかにも太陽の詩人、草田男のものである。「いくさなすな」は「いくさするな」といふ他所々々しい中間地帯からの掛声ではなく、「なすな」といふ人間の行為につながつた人間の願望だ。

永き日は不善を為すものの温床にならぬとも限らぬ。

生きてる生きてる汗拭き撫でみる目鼻だち

草田男の無心――。表現するのではなく、表現してしまふのだ。これは、出たとこ勝負と紙一重の危ふさに在るが、それだけに成功の喜びが大きいに違ひない。偶然のやうで、その実、人間の計ひを超越した、空間の「神」とでも言ひたい必然性が、間一発のところで表現にとび込んでくる。完結。

厚餡割ればシクと音して雲の峰
桐一と葉影が来かけて人去にぬ
うれしき日夏空一と日ながれたる
椎の実三粒呉れたりき出てゆけよがし
雷鳴のより巨き戸のまた開く音

こういふ時、生身はテコでも動かぬやうだ。脳天に雷が落ちても説明しない。一切の説明的要素を遮断したところに生れた詩。草田男の「茂吉の歌は、読者に解らさうとする余裕を無視して、作者の息吹をそのまゝ直接にぶつつけるやうな歌ばかりであつた。それが一つ一つ私には造作なく理解がいつた」やうな、さういふ筋金が、草田男の佳作と思はれる作品のすべてに通うてゐることに注意する必要がある。

三日月のせた水輪こちらへ来たがるよ

こういふ風に言はれてみると気付くのだが、水輪といふものは、じつと見てゐると、確かに、こちらへ来たがる、と、しか見えないものだ。ましてや、新しい光りを育くみつゝある新月を乗せて，薄明の中にちらちら動いてゐる水輪だ。作者は自分から手繰りよせたいところだらう。こんな無心な無垢な状態を一と時でも持つことが出来る草田男といふ人は何といふ人だらう。（生ま身では随分つらいこともあるだらうな。しかし、草田男は口惜しい男として作品に登場する）。

人生には眼に見えぬ無数の襞がある。さういふ襞に対する超風のデリカシイを持つてゐながら、先づ、己れに対して律義だから、関係に於ける内と外のスピードのアンバランスから、ずるずる人々の中に入つて、ひよいと、何か気付く。すると、もう伝家の宝刀に手がかゝつてゐるといふあんばいである。人々は、草田男の素材になつた人々は、大抵、草田男の一刀にずばりとやられてゐるのだ。かゝるとき、草田男は愚かしいまでに厳正な審判官のやうだ。

血族とても手と足のみやよく降る春

血族とても容赦はない。血族とても知己とは限らぬ。手と足だけでは本当は自分には無縁に等しへのだが、まあ、よく雨が降るよ。この春は。

草田男の滑稽――。これも無心と同一線上にある。何より、いゝ加減なところでこじつけの関連をつけない誠実さがものを言つてゐる。人にサービスするなどといふ余裕がない。ほんものの作品がときに滑稽を呈するだけだ。従つて、ほんものの滑稽である。花田清輝によれば「滑稽の根底には、切離れた魂と肉体とが同時に存在し、しかも、その眼に見えぬ魂がみずからの肉体の上に鎮座してゐる必要がある」。魂が肉体を遊離しては、土端場(注 土壇場)で単なるくすぐりに終る。草田男の律義さは先づそれを許さぬのだ。

身を結び身を解き孤り穴惑ひ

穴惑ひ未だ夕日にあらざりけり

蠖尺虫の焔逃げんと尺とりつゝ

この青年夏色しろし羔なきや

香水・真珠胃下垂の土人盛装図

と、例をひいてくると、句集の殆んどの句が滑稽の光りを放つてゐるやうで空怖しい。

完璧な詩性と青い果実の共存してゐる人間構造。青い果実は、おのれの愚かさをしたゝかに思ひ知り、詩性は生活の彼岸に橋をかけやうと志す。危ふさを冒して。二刀流。二刀を使ふのは、一とつらの魂だ。肉体と魂の分裂をしたゝかに思ひ知る俗天使。分裂の克服は、表現に依らねばならぬ。二つの力が同一点に働いて、第三の力の方向を生み、合力の図形を畫がく。相対立し、矛盾する力が同時に「全一」なものに流れ入り、まじり合つて、一つのポテンシャル・エネルギーをつくる為事。

円き泉二十年来一宣言

遅々たる歩み。二百年生存慾も無理はないのだ。可能を希ふ。しかし、真に二百年生きやうとする慾望の根拠は、為事の困難にあるので、その困難を貫いて生きてゐる者、つまり、こんにち、真に二百年的に生きてゐるものは、ひよツとすると短命かもしれないのだ。それにしても東西にわたる秀れた詩人の不文律、「死」は「生」の完結だといふ啞の確信に照し合せると、二百年は比喩にしてもチャチな年数に聴える。しかし、この時間のミリットの克服が「円き泉」に関はる筈なので、簡単ではない。――おそるべき律義。これはどうしても真正の散文の水脈にはなり得ないだらう。

草田男の妻――。「銀河依然」には妻の句が一〇句ほどある。しかし、巷説として流れてゐる「草田男と言へば女房を連想する」といつた文句の調子、(翼々たる畏妻家、或へはそれを裏返した暴君。)さう言つた風俗太平楽とはおよそ縁が遠いのであつた。尤も、亡くなつた太宰が、生前、文壇大家に嚙みついた言葉に「お前は、女房の気に入れられるために仕事をしてゐるだらう」。(「かあちやん、これだ勲五等」「勲五等? なあんだ。せめて勲三等ぐらひなら」。亭主がつかり)。草田男には、さういふ末梢態度が通用しない何か別な願望があつて、女房句が放たれてゐる。山村暮鳥は、己れの鼻たれ童子が赤い尻を丸出しにして、女房と眠りこけてゐる傍らで、祈りの詩を書いた。啄木は周知の通り「花を買ひ来て妻と親しむ」。流石の太宰も晩年近く、女房の小説を一つ書いた。但し、太宰は、これを〈夫婦けんか〉の小説だと断つてゐる。朝餉の最中、女房に鼻の汗を指摘された亭主が、その腹いせに、毒舌を振つて女房の汗のありかを追求してゆく。しかし、意外の一言「私? 私こゝよ。涙の谷。」と、乳房の間を示されて黙る。その夜、酒場で桜桃を喰ひ、次第に切なく、次々に喰らつては、口から鉄砲玉のやうに桜桃の種を吐きとばすのである。意味はある。しかし、こういふ根源的な夫婦けんかの間のかけ橋の願望を、太宰は生身で処しきれずに終つた。「家庭の幸福」を振り切つた。彼は先づ旦那芸を態度として忌避するところに創作の燃焼を求めた。

草田男は全霊をあげて妻と出会ふ。「家庭と芸術」といふものを、一般的通念で割り切らぬ。言葉の通念が一つの世俗的虚栄を生むといふ末梢を突き切つて、男・女・その子・詩・天地といつた中核の、赤き生命に触れ合はふとする。触れあひ得れば歓喜の詩となるが、深く入つた中核に己れ孤りの影しか見当らぬ場合は、こゝに恐るべき客観が生じ、その眼で、願望をこめた一矢が放たれる。

われを見る妻の眼汗を眼張りの中

冴ゆる客観妻の涙の眼も横顔

青蔦やあまりひしひし妻の加護

肩ごしに乳房見下ろす岩の春

池心の蓮唯一の女妻老いそ

見るから熱き妻の涙や息見え初む

動く袂マフラーまだ朱の歩む妻

いづれにせよ、世俗の太平楽とは縁が遠いわけである。

前途永き妻に加護あれ降誕祭

＊引用句は句集『銀河依然』に統一しました。

昭和28年6月号

【『東奥日報』記事】　わがホープ　俳句

一すじに〝人間探求〟
草田男流にあがいてみたい

〝暖鳥〟同人　成田千空

『草田男病患者といわれるけどむしろ光栄です、草田男だつて足掻いている、私だつて…一緒についてゆきたい』人間に無関係な俳句はいけない、という、非常に抽象的になるので省くが『詩だつてそうじやないですか〝汚れちまつた悲しみに、今日も小雪の降りかかる、汚れちまつた悲しみに今日も風さえ吹きすぎる〟センチメンタリズムだと誤解されるかナ』中原中也の詩をよみあげ『気息のあるものでなければ…』水原秋桜子の句は絶対いただけないという『気分的です、美しいんじやない、美しいらしいんです』ガラスの上に描いた絵みたいなものだと断言する、一途な己れの道を歩むものの言葉であろう

千空―空が千もある〝オレは空ツぽ〟空という文字の仏教的解釈からつけた号だそうだ、青森市に生れ青森市で育つた、青工の機械科をでて東京の富士航空軽機（注富士航空計器）に入つた、のべつに仕事して身体をこわした、昭和十六年である、俳句はこの頃はじめたもつとも義兄岡田晴秋によつて十分素地は作られていたが―玉麗氏の〝寂光〟に入つた

春浅き浪のとどろく漁者の日

こんな句があつた『結社は本能的に嫌いだつた、理論はなかつたが息苦しかつたです』出発は季題だけが手掛りだつたが、青森俳句会に入つてから俳句における人間というものがおぼろげに摑めてきた、この当時から草田男にはヘンな魅力を感じていた、つまり季題によつて作る〝遊び〟から一歩ずつ現在の方向へ指針をむけはじめたのであろう

今は五所川原町でささやかな本屋をやつている、大正十年三月生れだから三十である、終戦前に一時県水産試験場に勤めたが終戦後間もなく飯詰へいつた、そこで開墾をやつた、一昨年まで五年間―『これまで二回も三回も俳句をやめました、しかし空襲の晩、管制燈の下で芭蕉の句集をひろげていた、俳句をつづけているのは〝最後の夜も句集をよんでいた〟という微かな手掛りだと思うんです』未明から日没まで働いた『人は随分働くナ、といつたが、実は俳句を考えていたんです』自分自身を開墾したともいう、独言をくり返したという、この当時やつとヘンでなく草田男が判つてきたそうだ

本屋をやつたのは？『五所川原は商人の町でしよう、百姓やつていた時から何ぼか文化的なことをやりたいと思つて―』絵の展覧会、レコードコンサート、詩話会等をやつた、青年がたくさん集つた、本屋もその目的の一つであつたらしい『初めは本屋が副業みたいでした』店番をして俳句を考え、本を盗まれたのを知らずにいたこともたびたび『今は違います』

五尺七寸、顔の輪郭も知的である、去年結婚したばかり『絵をみても映画をみてもアツということがあります、こんなの俳句にできぬものかと』俳句の鬼みたいである

『福田空朗の俳句は一番抵抗になります、彼は生活の何%を俳句にかけているか判らないけど―』それから、こんどは井伏鱒二の言句を引用するのを〝いい人間にさえなれたら僕はこんなものを何も書かなくていいんだが〟というのである『問題はこんなもの―なんですがネ』

県俳壇に対しては『自分を賭けている人がない、その日ぐらしじやないでしようか、楽しんで句を作ること、別に否定はしませんが』

呼吸即俳句これが虚子評、切りこみが深いが何かほかにあるらしいというのが誓子評『草田男は人間のあらゆる所にぶつかる』という、仮にひいき倒しであつてもいいではないか、俳句第二芸術論は？『今のままなら仕方ありません、しかし将来のことは桑原氏だつて判らんでしよう』

『私だつて私の俳句が判らないといわれると悲しいですヨ、だがどうにもならぬ』『俳句も芸術だとすれば、これ位孤独な芸術はないですナ』判つて貰えないんだという、一つの途に苦悩する、何だつていいものは苦悩から生れるものだ

蜻蛉孵る左右前方潮の筋　　千空

推薦者　寂光主宰　高松玉麗氏

勉強家である、そして純情な人だ、線が細い様にみえるが非常に強じんなものを内容している、或る意味では不器用である、つまり要領よく作句できる人ではない、だから新しい境地を開拓するために苦しみつづけているらしい、今は難かしい句を作つているようだが、やがてそこを突き抜けて平明な所までゆくだろう、それがたのしみである

東奥日報夕刊　昭和27年1月25日付

新刊紹介

青森を文学で応援する会編

千空句帖　成田千空

青森文芸ブックレット③　青森文芸出版
A5判、並製、定価　1080円（税込）

戦時中に句集が手作りされていた。封印されていた235句を影印版（直筆）で公開・千空初期の俳句が明らかになる。

解説・西谷ともえ
（青森県近代文学館文学専門主幹・副室長）

青森文芸ブックレット（既刊）

①本と戦争　―本は、戦争とどう関わったか
佐々木達司　定価　500円（税込）

②中村草田男訪問記
成田千空　定価　500円（税込）

④津軽方言詩集　土筆（べべこ）
木村助男　定価　540円（税込）

。県内主要書店で販売中。
。A5判、並製、定価（税込み500円）青森文芸出版。
。直接注文も承ります。
（千空研究会会員に限り、送料無料）
振替番号　02340・4・134405
加入者名　株式会社　文芸印刷

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。
1．調査・研究に関するもの（4000字以内）
2．回想の成田千空（2000字以内）

締め切り　第8号は10月末、到着順に掲載します。

送り先　（下段発行所、青森文芸出版あて）
＊Eメールで送信くださる場合
sasaki@a-bungei.co.jp

会員名簿（45名）

〈青森市〉浅利康衛、高森ましら、成田奉生、西谷ともえ、野沢省悟、未津きみ、吉田州花
〈平内町〉佐藤陽子
〈弘前市〉阿保子星、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤隆、舘田勝弘、土田紫翠、三上弘之
〈藤崎町〉清水雪江、世良啓
〈八戸市〉上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次
〈十和田市〉日野口晃、米田省三
〈五所川原市〉一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、野村正彦、浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子
〈板柳町〉木村武彦
〈中泊町〉外崎文夫
〈つがる市〉兼平一子
〈深浦町〉草野力丸、山本こう女
〈盛岡市〉瀬川君雄

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

☆北極星☆

○山頭火の句を作品にしていた版画家・藤田健次さんにお願いして、巻頭を千空句の版画で飾ることにした。少年の日の藤田さんにも〈大粒の雨〉の体験があったのだという。版画も簡略化され俳句と通じるところがある。6ページの齋藤美穂さんの文章にもこの句についての従弟の年正さんの見解がある。それぞれが自分の〈大粒の雨〉を持っているのだろう。

○発行が遅れていた『千空句帖』がようやく刊行された。その分、充実したことを喜びたい。解説は十分に読み応えがあり、資料としても貴重である。これによって戦時下の千空俳句が明らかとなった。

○資料再録では、『萬緑』から、師草田男の句集鑑賞「ノート途次 ―「銀河依然」について」を紹介した。やたらと句読点や傍点が多い、32歳の千空さんの気負いが伝わってくるような文章である。晩年の穏やかな千空さんから想像できない一面がある。

○『文藝春秋』に2度にわたって掲載された千空句について考えてみた。昭和48年に掲載されたときは、驚きの眼をもって見たことを思い出す。前後の相違も興味深いものがある。

2016年8月20日発行
会報『千空研究』第7号　非売品（会員配布）
発行　俳人 成田千空研究会
佐々木　達　司
〒037-0004
五所川原市唐笠柳藤巻467
青森文芸出版内
TEL　0173-35-5323
FAX　0173-35-8414